



2018 年 (平成 30 年)

1月号 (No. 872)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

早大隊の若手3人がチャレンジ、未踏のラジヨダダ峰登頂に成功	1
創立50周年を迎えた国立登山研修所と高校山岳部の雪崩遭難	4
立山博物館の特別展「宮様、山へ」と紛失したフィルム	6
平出和也・中島健郎のシスパーレ北東壁登山隊がビオレドール・アジアを受賞	7
「登山者のためのコンディショニング・ストレッチ教室」開催報告	8
シカを見たらスマホで送信!	9
東西南北	10
活動報告	11
山行委員会/資料映像委員会	
第34回全国支部懇談会	12
図書紹介	14
新入会員	15
図書受入報告	15
会務報告	16
ルーム日誌	16
会員異動	17
INFORMATION	17
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
 月・火・木……………10~20時
 水・金……………13~20時
 第2、第4土曜日……………閉室
 第1、第3、第5土曜日……………10~18時

早大隊の若手3人がチャレンジ、未踏のラジヨダダ峰登頂に成功

早稲田大学山岳部で育ったOBと学生の若手3人チームが昨秋、ネパール・ヒマラヤのラジヨダダ峰(6426m)の初登頂に成功した。目標とする山を探し出し、起こり得る様々な事態を想定してケースタディを重ねたという。26時間の連続行動で無事BCに戻って来るまでを、萩原隊長に報告してもらった。

未踏峰を探して

未踏峰へのチャレンジは、体力と気力が充実しているときに必ず実現させたいと思いつけてきた大きな目標でした。40日かけたヒマラヤ登山は、反省点は多いものの若い3人にとって手応えがあり、実り多いものでした。

辺境の地にそびえ立つラジヨダダを見つけたのは、当時、現役部員だった鈴木雄大と福田倫史の2

萩原鼓十郎

人です。カトマンズから100km、2014年に解禁された104座の中の一峰で、登高意欲をそそる三角錐の独立峰です。2015年、10人の部員が参加したアイランド・ピーク合宿を終えた鈴木らは、次の目標をヒマラヤの未踏峰に求めました。カトマンズでトレーニング・マップを何種類も買い、未踏峰リストの緯経度をGoogle Earthに打ち込み、ラジヨダダを

探し当てました。ネットで写真も手に入れ、一緒に登らないかと、私に誘いを掛けてきました。

鈴木はクライミングからスキーまで幅広く楽しむ男で、アメリカに1年間留学した折も登り込み、滑り込んで力を蓄えました。就職先も決まっている新OBです。

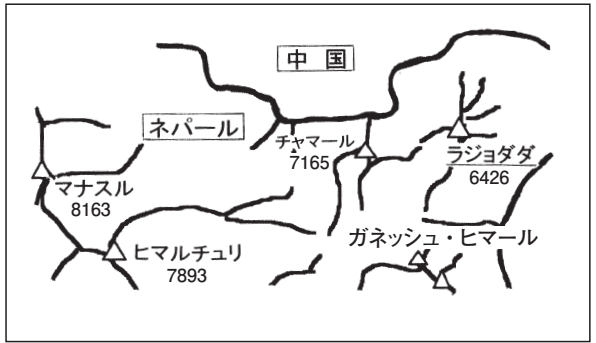
福田は4年部員でキャプテン。登山の知識や実力は学生の水準を超えており、物事を的確に処理する能力を備えたしつかり者です。

萩原は、総合商社に勤めて3年目(IT関連部門)。卒業後1年半は登山から離れていましたが、ラジヨダダが視野に入ってから、現役時代と変わらぬペースで山に行き、朝のランニングを欠かさないうような努力しました。初めての海外登山は2012年のアコンカグ

山岳部後輩との登山を選ぶ

いかに生きるかを自分なりに熟慮し、鈴木、福田の誘いに乗ることを決めました。そして、「仕事」と「登山」を両立させることができないうか、二兎を追う道を探して会社に理解を求めました。

OBの間で当初、3人の動きは懸念の目で見られていました。しかし、現役部員たちの活動が停滞ぎみのなか若い私たちへの期待も大きく、ラジヨダダ登山を創部百



周年の記念行事の先駆けとして位置付けてくれました。そうなるに経験豊富なOBたちが、登山中に起こり得る様々な事態を想定してケース・スタディを指導してくれました。残念ながら会社への長期休暇願いは叶いませんでした。

「行動記録」 ベースキャンプへ

9月19日、カトマンズ着。まずはスーパーマーケットで食糧を買い足す。パスタや米、非常食、オートミール、袋ラーメンなど、日本から持ち込まなくともここでも

んでもそろそろ。翌日は登山許可をもらうため、現地の旅行ガイドと観光局へ。持つて行く食糧の量や行程表などの報告を求められた。

23日、8個の重い荷物をバスに積み、登山基地の村ソティ・コーラへ。予定より15km奥まで進むことができた。さらに2人のポーター、6頭の馬とともに広い谷を進んで行く。トレッカーはほとんどいないが、民家やロッジが点在している。キャラバン4日目、ラジヨダダの麓のムゲンバ(3600m)に到着。5日目、少し傾斜を増した斜面を登って、4560m地点の平らな草原にBC適地を見つけた。高度のせいだろう、3人とも体調はいまひとつで、以後6日間は誰かが寝込んでいた。

荒れた氷河帯を抜けAC設営

10月も7日になって、3人とも完全復調。4900mあたりで氷河に足を踏み入れる。アイゼンを着け、ゆつくりとしたペースで登っていく。

5150m地点に平らな場所があり、おまけに小さな水たまりができていて、景色もすばらしいこの場所をC1とする。アタック・

キャンプ(AC)の設営と高所順応が次の段階のミッシェンだ。

複雑なクレバスを避けながら、慎重にルートを見つけていく。遠目に見ると緩そうな斜面も、近付くと大きな穴が開いていたりして苦勞する。かなりのテクニクが要求される氷壁が次々と現われる。危険箇所にはロープを固定するなどし、3日間かけて5730m地点にACを設営した。

13日、頭痛がひどい福田を残して萩原、鈴木で上部の偵察へ行き、5900mまで登った。頂上までのルートを確認し、濃いガスで視界が全くなかったため引き返し、福田とともにBCまで下った。

頂上アタックは26時間の苦闘

ヤマテンの猪熊隆之さんが送ってくれる天気予報は、10月17日から3日間の好天を予測していた。いよいよアタックだ。14日はBCで休養し、15、16日と体調を見計らいながらACに上がる。

アタックの前日になって、初めてラジヨダダ本峰の姿が見えた。すばらしく綺麗な三角形だ。興奮を抑えて早めに眠りについた。

10月17日は2時起床。未明の空



まるで迷路のような氷河を慎重に進む

を見上げると、無数の星が輝いている。快晴、無風。気温はマイナス6度。3時半に行動を開始した。登り始めて30分ほど経ったころだった。稜線へと続く傾斜40度ほどの斜面で、大きな音とともに数十m上で雪崩が出た。

トップを歩いていた鈴木が立つたまま15mほど流され、横つ飛びに逃れるのが見えた。雪崩は30mほど流れて自然に止まる。多い所で25cmほどの厚みがある表層雪崩だった。その後は硬くて氷混じりの斜面を選んで登り、稜線に出る。朝日に輝くラジヨダダを見ながら登攀を続け、1000mほど標高を上げて無名峰(6200m)の頂

を踏む。そこからラジョダダへは、緩やかな下りぎみの稜線が続いていた。

この標高で、全く予期しなかったアルバイトを強いられることになる。膝まで潜るラッセルは、高所順応が完全でない3人にとつてまことにきつい。スノーシューをBCに置いてきたことが悔やまれた。ペースが大幅にダウンし、先のことと考えると一瞬、不安になる。ラジョダダ本峰の基部に着いたのは12時半だった。遅い。

ここから山頂までは高度差250mくらい。行動食を食べ、荷物を置いて空身で登り始める。下から見た限りでは大部分を同時登攀で行けるように見えたが、実際に登り始めると、登攀ルートの右、西側は2000mほど切れ落ちており、60度以上ありそうな急斜面となつて、スタカットでのクライミングを強いられる。そのうえスクリューが効かず、スノーバー4本とデッドマン2本という、ぎりぎりの装備で登る羽目になつてしまった。アンカーをセットしてロープを固定、後続がアッセンダーで登るスタイルで登攀した。

緊張する登攀にも終わりがあつ

た。雪庇のように見えていた壁を乗り越え、そこが頂上だった。それまで北と東側しか見えなかった視界が開けて、360度のパノラマが一望できた。

北に広がるチベットの山々が夕日に照らされ、西にチャマル、東にはガネツシュ・ヒマールが雲海から顔を出していた。3人で初登頂の喜びを囁み締める。

夕暮れが迫っていた。念願の登頂の喜びも束の間、懸垂下降に取り掛かる。闇が追いかけて来るなか、なんとか基部まで降りてきた。チョーシン・ヒマール稜まで戻ってきた所で、暗闇のなか、登りにルートを採った岩場を下るのは危



チョーシン・ヒマールの稜線から見たラジョダダ。右の稜線沿いに登る

ないという判断で、稜線の6200m付近から氷河へ向かつて懸垂下降することにした。その方が安全だし早いと考えたこの選択が、長い夜の始まりとなつてしまった。

懸垂下降した先にはスクリューが効く氷もなく、張り出した岩が邪魔してスノーバーも打ち込めない。真下は暗闇でよく見えないが崖のようだ。月はなく星明かりとヘッドランプが頼り。なんとか刺さったスノーバーを頼りに下降を続けようとしたが、60mのロープが何かに引つ掛かつて動かなくなり、回収も不能になる。焦った。使えるのは残った60mロープ1本だけとなったが、幸いその1ピ



夕暮れのラジョダダ山頂に立つ。左から福田、萩原、鈴木

ッチを終えると後はロープなしで下れる雪面に帰ることができた。登りのトレースを頼りに、心身ともにくたくたでACテントにたどり着いたときには、日の出を迎えていた。

一生忘れることはないだろうアタックの26時間。技術的にも判断力でも未熟だった私たちにとつて、この間、晴天が続く風もなかったのが幸いだつた。多くの反省点を今後の登山に活かしたい。

*

キャリア（仕事を含めた生き方そのもの）と登山を両立させ、二兎を得たいと思っていました。それは叶わなかったものの、会社を辞めてでも挑戦して良かったと思います。魅力的な未踏峰が残っていること、自分に十分な体力・氣力があること、信頼できる仲間がいること。この3つがそろうなど滅多にないことですから……。

今回の経験を次の仕事に活かし、その仕事で得た学びを次の登山に活かす。この先、キャリアと登山の両立を目指し、実現し、それが後輩の挑戦を後押しすることになれば本望です。

（早稲田大学山岳部OB）

ANNIVERSARY

創立50周年を迎えた国立登山研修所と
高校山岳部の雪崩遭難

50周年記念式典の開催

国立登山研修所(文登研)の創立50周年を祝う記念式典と祝賀会が2017年11月26日(日曜日)午後、富山市の高志会館で催された。上部組織である独立行政法人日本スポーツ振興センター、スポーツ庁幹部、山岳組織代表、地元関係協力者ら160名余りが参加した。

記念式典では各方面の代表挨拶、祝辞の後、功労者、協力者名が読み上げられ、感謝状が贈呈された。

この後、記念講演となり、重廣恒夫・日本山岳会副会長が「人と山を繋いだ登山研修所」というタイトルで1時間にわたって話をした。

昆虫採集をきっかけに山登りに目覚めていったこと、K2、コンクール登山、山岳雑誌『岩と雪』が果たした役割、NHKが映像で盛り上げたかたちの日本百名山ブームなど、持ち前の早口でテンポ良く語り掛けた。重廣氏は1974年から14年間、この研修所の主任

江本嘉伸

講師を務めており、その際に培われたつながりが、ヒマラヤ登山に大きな力となった。

私は研修所の専門調査委員の一人としてこの式典に参加したが、この施設が山を愛する若い命を守るために、今後も日本の最重要拠点であり続けてほしい、と祈りにも似た思いを抱いていた。なぜそう思うのか。

那須岳の高校生雪崩遭難

7ヶ月時を戻す。昨年3月25日の土曜日、朝从那須塩原駅に向かった。春山訓練に入る高校山岳部の生徒たちの「教科」の時間に話をする事になっていった。テーマは自由に決めてほしい、と言われていたので、「山岳部がどうしてすばらしいか」というのが、私が決めたテーマだった。

幼いころからコンピュータ・ゲームを覚え、バーチャル世界を当たり前として育ってきた若者たちが、コンクリートの世界を離れ、土を踏み、風の音を聞き、ありとあ

らゆる自然の声に耳を澄ますことのすばらしさ、を伝えたかった。

集まった高校生たちは、大自然へ分け入っていく瞬間を前に、心なしか昂揚しているように見えた。話だけでは退屈するだろう、と写真も選んでおいた。山岳部時代の剣や穂高でのモノクロ写真、新聞記者になって山岳部の経験を活かして繰り出したチョモランマや北極の人と風景。そして、春夏秋冬三十数回も通い続けたモンゴルの大草原の人と動物たち。静かに、しかし熱心に聞いてくれている高校山岳部の若者を前に、私の口調には思わず熱がこもっていたことであらう。90分の「教科」を終え、「では皆さん、いい山登りを」と話を締めくくると、思いがけず万雷の拍手が湧き起こり、それが長く続いた。驚くと同時に、私の気持ち

は高校生たちに伝わったのだ、と嬉しかった。

1日置いた27日の月曜日、今度は北陸新幹線から富山地鉄に乗り換え、立山の国立登山研修所に着いた。『研修所50年史』の編集の仕事だった。出迎えてくれた一人が「苦勞さんです。実は、たった今情報が入って……」と、緊張した口

調で伝えた。「江本さんの話を聞いた高校生の何人かが雪崩に埋まった、と……」。ええっ!? 私は呆然とした。

その後のことは、知られていないとおりである。栃木県高校体育連盟の春山安全登山講習会には、57人の高校山岳部員(いずれも1、2年生)が参加、那須温泉ファミリースキー場にテントを張り、3日間の合宿をしていた。3日目の27日は荒天で、計画していた登山を中止し、ラッセル訓練に切り替えた矢先、雪崩が発生、7人の高校生と先生1人が帰らぬ人となった。安全登山のための講習会が、最悪の事態を引き起こしてしまったのだ。

あまりのことに私は言葉を失った。私の話をあれほど熱心に聞いてくれた少年たちが、今はいないなんて……。

立山からはその日のうちに帰京した。今、自分にできることは何か自問したが、思いがけなかった。生徒も先生も私のことはしつかり覚えていいるだろうが、私自身は個人としては誰も知らない。当面じつと推移を見守ることしかできない、と悟った。警視庁捜査一課の



記念講演をする重廣恒夫・本会副会長

担当者から電話が入り、入山前の「教科」を担当したことの確認を求められたが、それだけだった。

なお、那須岳の遭難については11月28日、「高校生等の冬山・春山登山の事故防止のための有識者会議」が開かれ、レポートをまとめている。

国立登山研修所の誕生と推移

国立登山研修所は、1967(昭和42)年7月に開所した。当時、日本隊のマナスル登頂に刺激されて登山人口が急速に増え、そうしたなかで山岳遭難が多発した。とりわけ、昭和37年12月から38年1月にかけて、のちに「サンパチ豪雪」と呼ばれる大雪による大遭難が相

次いだ。

大雪山縦走を目指していた北海道芸芸大学函館分校山岳部の11名が遭難、リーダーを残して10人が死ぬという未曾有の悲劇となった。ほぼ同時期、富山県の折立峠から薬師岳の登頂に挑んだ愛知大学の13人がルートに迷って動けなくなり、全員死亡するという最悪の事態が起きた。連日、新聞、テレビで報道されたこの悲惨な山岳遭難事故を未然に防止するために、「国立登山センター」を設置する準備が始まった。

設置場所については蔵王や日光谷川、上高地などの名も上がったが、初歩から高度な段階の岩登りや雪上訓練、縦走訓練まで、四季を通して訓練場所が豊富にある、富山地方鉄道立山駅に近い立山町芦峯寺ブナ坂(千寿ヶ原)に研修所本館を設置した。

昭和42年7月1日に開所式。第1回登山指導者養成研修会(昭和42年7月28日)では、横有恒が「登山とその指導について」のテーマで講義した。以後、浦松佐美太郎、今西錦司、梅棹忠夫、深田久弥、三田幸夫、村井米子といった山の知性たちが立山を訪れ、毎回の研修

会では冒頭に行なわれる特別ゲストによる講演(あるいは講義)が目された。時代を代表する登山家、学者ら錚々たる面々が立山を訪れたのだった。実技指導に第一線の優れたクライマーたちが当たってきかたこととともに、研修所のあるべき姿を問うた、これらの先達が多たらしてきたものも大いに評価されていいだろう

開所翌年の昭和43年には剣沢に夏山前進基地を建設、45年に人工岩場竣工。しかし、平成12年には大日岳で遭難事故が発生、研修生2人が犠牲となり、研修事業は一時期中止された。

平成21年、独立行政法人日本スポーツ振興センターに移管、現在に至っている。

『50年史』の刊行と登山研修所の明日

記念式典では『国立登山研修所50年の歩み』が参加者に贈られた。総260ページで、次の6章に分けられている。「1章 登山研修所と研修会への取り組み」「2章 研修会の充実と調査研究の始まり」「3章 研修会の整理統合と教材用テキストの充実」「4章 中高年登山者増加への対応と施

設・設備の充実」「5章 北アルプス大日岳遭難事故と研修会全体の見直し」「6章 独立行政法人日本スポーツ振興センターへの移管と関係機関・団体との連携」

年が明けて1月11日、今年初の「登山研修所専門調査委員会」が開かれた。目前に迫った東京オリンピック・パラリンピック開催のため、当面、予算面ではこの研修所も厳しい状況だ、と説明された。しかし、いのちの問題と向き合う登山研修所の使命は、オリンピックよりはるかに大事ではないか、と私は考えている。

国内唯一の山岳遭難対策制度™ jRO(ジロー)の会員制度

捜索・救助費用を330万円までカバー。

○年齢制限なし ○病氣遭難にも対応!! 登山スタイルは問いません



入会お申込みは、リーフレットまたはWEBからできます。

<http://www.sangakujro.com/>

入会お問合せ先 jRO事務センター

TEL. 042-669-5330 FAX. 042-669-5331 E-mail: jro@e7a.jp
(平日10時~17時)

日本山岳救助機構合同会社 Japan Rescue Organization

EXHIBITION

立山博物館の特別展「宮様、山へ」と
紛失したフィルム

芳賀孝郎

昨年10月21日から11月26日まで、

富山県・立山博物館で「宮様、山へ」と題した特別展が開催された。

大正期の登山ブームの中での、皇族登山に關しての興味深い展示会であつた。その内容は、登山史研究家の布川欣一氏が監修し、当時の写真、時代背景を示す新聞記事、登山道具などを紹介したもので、よくぞ資料を集めたことに驚きを感じた。さらに文部省制作の映画『秩父宮殿下立山御登山』（1924年、秩父宮の立山スキー登山の記録映画）も見ることができた。

宮様の最初の登山は、1900（明治33）年8月13日、久邇宮鳩彦王と久邇宮稔彦王による「富士山登山」である。続く宮様登山は、下記のとおりである（立山を訪れたことのある宮様の、北アルプス登山のみ。立山博物館調べ）。

「東久邇宮稔彦王」

1916（大正5）年 上高地・槍ヶ岳・大天井岳・燕岳・中房温泉
1917（大正6）年 白馬岳

1919（大正8）年 立山

「朝香宮鳩彦王」

1920（大正9）年 白馬岳、燕岳・槍ヶ岳

1921（大正10）年 立山、剣岳

1922（大正11）年 農鳥岳、北岳、仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳

「秩父宮親王殿下」

1923（大正12）年 中房温泉・燕岳・大天井岳・槍ヶ岳・上高地

1924（大正13）年5月 立山、浄土山スキー登山

1925・26（大正14・15）年 マスターホルン、モンテローザほか

スイス・アルプス登山
1928（昭和3）年 英国山岳会名誉会員に

「竹田宮恒徳王・北白川宮永久王」

1926（大正15）年 剣岳・立山・浄土山・佐良峠・五色ヶ原・平針ノ木峠・大町

以上が大正時代の宮様登山である。
昨年8月、立山博物館から1通の手紙を受け取った。その内容は

10月から開催する特別展の企画に協力してもらいたく、関係資料をぜひ提供していただきたい、というものであつた。

早速、私は三田幸夫関係の資料の入った箱から1924年、秩父宮の立山スキー登山のフィルムを見つけ出した。開いてみると、その中に三田自身が書いた12枚のフィルムの説明書が付いていた。フィルムと資料を立山へ郵送した。すると立山博物館岡田学芸課長から下記のような通知を受けた。

「これらの写真は当該山行を記録した現存する数少ない画像資料である。当該山行当事者の一人、三田幸夫の所有であつたという資料履歴と併せて大きな意味を持つものである。特にネガフィルムには、これ以外に伝存が確認されず、日本登山史上の根本史料の一つとして極めて貴重である」

ところが今回、12枚の写真（印画紙）はあつたが、確認できたネガは10枚のみであつた。2枚のネガが紛失していたのである。その2枚の写真は、下記のとおりである。

写真番号4（三田の説明書の5）…浄土山頂にて。左から大島亮吉、前田、殿下、三田／写真番号



浄土山頂にて。左から大島亮吉、前田、殿下、三田

5（三田の説明書の6）…浄土山頂にて。左から殿下、三田、横有恒大島

秩父宮の随行者はリーダー横大島、三田、早川の慶応山岳部と細川、伊集院、坊城、前田、岡部渡邊の学習院山岳部であつた。

写真番号4については20年以上前、私の妻が日本山岳会の会合で、ある会員の方から「三田さんの写真」としてもらったことがあつた。この貴重なネガを探し出したいものである。

私は20年前、アルバータ峰の折れたピッケルの石突き部分を探するため、会報に投稿して見つけ出したことがあつた。今回のネガフィルムが現われることを期待したい。

REPORT

平出和也・中島健郎のシスパーレ北東壁
登山隊がピオレドール・アジアを受賞

その年の最も優れたアルパイン・クライミングに対して贈られるピオレドール（黄金のピッケル賞）。そのアジア版といえる第12回ピオレドール・アジアの審査会が2017年11月3日、韓国のソウル市で開催され、日本の平出和也・中島健郎によるシスパーレ北東壁初登攀の記録がピオレドール・アジアに輝いた。

2017年の最終ノミネートに残っていたほかの登山記録は、中国チームのチョラ東峰（中国四川



受賞式で「金のピッケル」を手にする平出、カバディア両氏（左から3・4人目）

省、6163m）新ルート、韓国チームによるダラムスラ（インド・ヒマラヤ、6446m）北西壁新ルートであったが、スケールの大きさ（高距差2700m）、技術的困難度（M6/WI5）、そして理想的な登攀スタイル（少人数・低予算で、環境への負荷を最低限に抑えたアルパイン・スタイルでの新ルート登攀）などの理由から、審査委員11人の満場一致でシスパーレ隊への授賞が決まった。また、韓国のダラムスラ北西壁に関しては、スペシャル・メンションとして審査委員による高い評価があったことが受賞式で言及された。

ちなみに昨シーズンの日本人によるヒマラヤ登山は、シスパーレ北東壁以外にも佐藤裕介・増本亮のベアトリス（カラコルム、5800m）東壁フリー化、横山勝丘・長門敬明によるK7西峰（カラコルム、6615m）南西稜初登攀といった成果があり、3隊とも歴史に残る好記録として推薦しておいたのだが、事務局からの予備選考が

1隊に限られていたため、シスパーレだけのノミネートとなっていた。これまで10年間、同賞の審査委員を務めてきた私としては、カンカ北壁、カメット南東壁、テンカンポチエ北東壁、デナリ継続登攀といった記録が続出し、カランカとカメットが日本人初の（本家）ピオレドールを受賞した2008年（受賞は2009年）が思い起こされる。アジアのピオレドールに輝いたシスパーレ北東壁をはじめとする日本隊の各記録を、本家ピオレドール審査

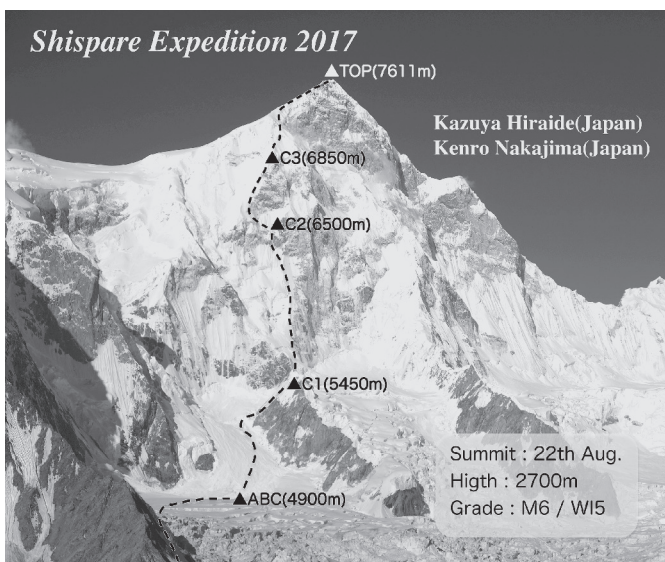
委員会がこれからどのように評価するのか、注目して見たいものだ。

また、ライフタイム・アチーブメント（生涯功労賞）に選ばれたのは、インドの『ヒマラヤン・ジャーナル』編集長ハリシュ・カバディア氏。インド・ヒマラヤ登山に対する、長年にわたる貢献が

評価されての受賞であり、誰もが納得のいく選考であったと言えるだろう。

同日に行なわれたフリークライミングの業績を顕彰する「ゴールデン・クライミング・ジョー・アワード」は、韓国のチョン・ジョンウォンが受賞。ボルダリング・ワールドカップ2017のシリーズ優勝と、自然の岩で複数のV15の課題（日本・瑞牆山のアサギマダラも含まれる）を登ったことを併せての評価であった。

（萩原浩司）



シスパーレ北東壁の登攀ルート

REPORT

「登山者のためのコンディショニング・ストレッチ教室」開催報告

医療委員会

医療委員会は2017年10月26

日に東京体育館で、登山者のために膝痛と腰痛にフォーカスした教室を主催した。西方由美子講師(東京女子体育大学卒)は健康運動指導士で、分かりやすく、楽しい教室を開催している。コンディショニングとストレッチは、最近Mobility First、つまり関節や筋肉の柔らかさが最も重要で、筋トレはその次のステップと考えられるようになり、重要性が見直されている。本教室の目的は、ケガや病気をしないで登山ができるようにセルフ・コンディショニングの方法を学ぶことだったが、体に柔軟性がないと筋トレをしても効果が上がらないということが、繰り返し強調された。

実習は首の周囲の筋肉をほぐすことから始まった。膝や腰の痛みは骨格のゆがみから起こり、下肢は股関節と膝関節の屈曲、足底のアーチの乱れなど、体幹は猫背、よじれ、骨盤後傾などが原因になる

という。

コンディショニングはリセット・コンディショニングとアクティブ・コンディショニングに分けられ、リセットは筋肉の弾力を取り戻し、骨格を整えるもの。アクティブは動作を改善し、使えていない筋肉を使えるようにパワーアップするものだそう。まず、膝痛対策の下肢のリセットについては筋肉に意識を向けず、足指をグルグル回してから膝を持ってユラユラと小さく揺さぶって筋肉をほぐしていく方法。アクティブは呼吸とともに筋肉を意識して、仰向けや横向きで脚を上下させ、うつ伏せになつて下肢を上下させ、足首を回転させる運動を実習した。

ひと休みしてから、腰痛対策として胸とお腹周りを膨らませ、へこませるとい呼吸の実習から始まった。体幹のリセットは背骨を緩めるために、仰向けに寝て両腕を上にはばくしては落とすキョウソトン運動をし、腰をユラユラと小

さく左右に揺らし、膝を抱え込んで左右の膝をスリスリこすり合わせる運動を行なった。次に座って長く息を吐いて、上部と下部の胸郭のリセットをした。アクティブとしては、仰向けで大きく息を吸ってから、8秒かけて長く吐くロングブレス、うつ伏せで同様なことを繰り返す運動をした。

最後に登山前後のストレッチを立てて行なった。登山前には動的ストレッチとして腕を大きく回旋させる運動、前に突き出す運動、体幹を左右に倒す運動、足を前に出して重心を落とすランジ、膝を前に引き上げて後ろに戻す運動、膝をサイドに引き上げては前に回して後ろに戻す運動、正面を向いて足を少し開いて膝を上げる運動やフロント・ランジなどを行なった。静的ストレッチは筋肉を伸ばしてそれをキープさせるもので、登山者がよく行なっている運動で、登山後や就寝前に行なうと良いとのこと。実習は西方講師のトークにのせられて、和気あいあいとした雰囲気に進んだ。柳澤香アシスタントの「You are your doctor. 朝と夕に、まずは足を触ってほしい」という話も印象的だった。



西方講師の軽妙なトークにのせられて34名がエクササイズ

参加者は男性11名、女性23名だった。事後アンケートを提出した31名については、40歳台〜80歳台で、50歳台が最も多かった。会員と準会員が23名、会員外が8名だった。評価は4段階で「とても良かった」が28名、「良かった」が3名だった。感想は「実践主体で分かりやすかった」「いつもと違う動きが多く、目新しい感じがした」「終わってから身体が暖かくなった、軽くなった、動くようになった」などの感想が多かった。

自分の体を緩めてコンディショニングするセルフケアの重要性を実感し、学ぶことができ、有意義な実習だった。(野口いづみ)

シカを見たらスマホで送信！（シカ目撃情報収集にご協力を）

―自然保護委員会からの提言―

シカの数が増え過ぎて、山の環境が大きく変化している、という話を耳にすることが多くなりました。実際に山中でシカの姿を見ることが増えていきますし、シカによる食痕で森の下層部がガラんと空いている光景や、かつての綺麗なお花畑が姿を変えてしまった場所もあります。また、林業被害、里山での農業被害も100億円を超えるレベルとなっています。

シカの分布域は40年前の2・5倍に増え、2050年には500



ブナの樹皮に残されたシカの食痕

万頭に達して、都市部以外はシカだらけ、という推計もあります。行政はシカの捕獲に向けた様々な施策を打ち出していますが、そのためには、シカの分布域とその拡大状況をできるだけ正確に把握することが大きな課題となっています。現在、森林総合研究所(国立研究開発法人)がウェブサイト「シカ情報マップ」でシカ目撃情報の収集を始めています。

会員・準会員の皆さんは、登山中にシカに遭遇することがあると



シカの食害で下層植生が喪失した森

思います。私たちの山環境を守るために、ぜひともシカの目撃情報収集に協力をお願いします。スマホでサイトにアクセスすれば、位置と日時は自動入力されるので、頭数と種別(シカ/カモシカ)を入れて送信するだけです。

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」をもう一歩進めてみませんか。

サイトURLは、

<https://shikadoko.jp/>

現在はスマホが電波圏内の地点でしか操作ができませんが、来年にはオフラインで入力し、圏内に入ったら自動的に送信するアプリを開発予定とのことです。

シカ目撃情報の操作(スマホ)

- ①サイトにアクセス <https://shikadoko.jp/>
検索：シカ情報マップ
- ②位置情報許可ボタン
- ③「シカ目撃報告」をクリック
- ④「シカの種類」を選ぶ
- ⑤頭数を入れる
- ⑥送信確認ボタン
- ⑦送信ボタン

「山の日」歳事記 一月 今年はと思ふことなきにしもあらず 子規

子規29歳。三十而立を前にどんな志を持ったのであろうか。

年次晩餐会で山本正嘉会員の講座を聞いた。毎週水曜日に福岡の500mほどの山に登る会があり、体力づくりが大いに役立つというとのこと。

年々体力は衰える。それを補

うには年齢と同じ回数、山に登るに限るようだ。70歳では月6回弱。月6回、誰と登ろう。山の日には4歳の孫2人と高尾山に登ろうか。毎年あの山、この山と考えるのが常であったが、今年は回数を狙おうか。

(岳人)

東 西 南 北

韓国・束草市の2つの博物館

沖 允 人

2017年10月下旬、『インド・ヒマラヤ』韓国語版出版が韓国の出版社で計画されており、打合せのため、10年ぶりにソウルを訪れた。2019年には出版される予定だという。

韓国では、登山者に世界の山岳良書を翻訳して出版するというプロジェクトが進められおり、これまでに選定委員会が選んだ約50冊が翻訳出版されている。日本語の本では『山岳征服』（三木高嶺）『新稿 日本登山史』（山崎安治）などが出版されている。『インド・ヒマラヤ』もその1冊に選ばれたという朗報である。

この機会に次の2つの登山関係の博物館を訪ねた。近年、目覚ま

しい活躍をしている韓国登山界の現状や歴史を知り、また、韓国岳人との交流の機会として訪れることを検討していただければと思う。

① 国立山岳博物館



韓国本土の最高峰である雪岳山山麓の束草市に2014年にオープンした国立山岳博物館がある。束草市はソウルから約2時間であ

る。国立山岳博物館は広大な敷地にある4階建ての建物で、韓国登山の歴史・活動を示す展示館、映像設備のあるホール、各種トレーニ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

ング室、資料室などが充実している。(National Mountain Museum, 住所・3054, Misiryeong-ro, Sokcho, angwon-do) 高速バスターミナルの西約6 km

(韓国語ホームページ)

http://www.forest.go.kr/newkfswb/kfs/idx/SubIndex.do?orgId=mm&mn=KFS_37

② 朴鐵岩(パク・チュール・アン)記念館



国立山岳博物館近くにオープンした朴鐵岩記念館はほとんど日本人には知られていない。

2016年7月に他界された朴

鐵岩氏を記念する私設の小さな記念館である。朴氏は韓国で最初に

ヒマラヤ登山(1962年・ダウラギリII峰)を行なった人であるが、ヒマラヤ登山を続けた後、チベット奥地探検に意欲的に取り組み、10回以上チベット奥地を探検し、特にチベット高原「無人区」を

踏破したことで知られる。著書も多く、数々の賞を受賞された探検家である。束草市近くにあった氏の旧住居近くに、友人・家族の方が遺品や記録・資料を整理して、公開したものである。ペンションが併設されているので、宿泊も可能である。

(Park Chul Am Memorial Museum, 住所・49-1, Baeckdam-ro, Yongdae-ri, Buk-myeon, Inje-gun, Gangwon-do) 日本語での問合せ・KOREA 李敏淑・greencat6512@gmail.com

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

「四国八十八ヶ所歩き遍路② 順打ち―国高知参り」に参加して

10月20日から11泊12日で「四国八十八ヶ所歩き遍路②順打ち1国高知参り」に東京多摩支部から参加した。総勢10名。役員3名(内1名先達)、初参加者2名。高知県内の甲浦(こうら)駅から室戸岬を経由して足摺岬まで、第24番札所御最崎寺から第38番金剛福寺までの順打ちだ。高知は次の札所までの距離が長く、2、3泊して日に30km以上歩く日々が続く。足のマメと台風に悩まされた。

国道55・56号からは大海原、とくに波高い太平洋が続いた。我を忘れて写真撮影を楽しんで四万十川と四万十大橋。しらす、須崎の鍋焼きラーメン、そして、毎晩のように薫焼きのカツオのたたきと

焼酎を味わった。お遍路さんのみ時間外の早朝歩ける牧野富太郎植物園の見学。36番青龍寺では、相撲留学時代の第68代横綱・朝青龍ゆかりの長い石段が続く本堂と弘法大師空海の師匠である恵果阿闍梨の堂などを参拝。ビールにまつわる土佐の方言「たつすいがはいかんぜよ」と「こじやんとうまい」は良いおみやげ話となる。

土佐漆喰の白壁に水切り瓦の吉良川の街並みを歩きながら、次回は「遍路宿 蔵空間茶館」に泊まってみたいと思った。土佐のビジネスホテル、民宿、温泉旅館、金剛頂寺と岩本寺の宿坊。フロント、女将さん、若ご夫婦とご高齢の看板娘さん、住職のご法話と、お遍路宿の思い出は尽きない。

超大型台風21号で不安な夜を過ぎた翌朝の金剛頂寺ご住職の法話は、青年時代の空海についてだった。すぐさまその修行場所にな

遭難対策委員会より 登山計画書のチェック体制の 構築とその提出について

委員長 川瀬恵一
担当理事 中山茂樹

すでに「山」12月号でご案内を掲載し、同時に当会のホームページにも速報でお知らせしておりますが、会員のすべての皆様に周知徹底するため重ねてご案内します。

当会は一昨年11月と昨年8月に死亡遭難事故を起こしました。この2つの事故でお亡くなりになった皆様の尊い命を無駄にせず、より一層の安全対策を会として講じていくことが急務であります。

そして昨年12月の理事会で、各支部、本部委員会ならびに本部同好会において登山計画書のチェック体制を構築すること、会員の行なうすべての登山において登山計画書を遭難対策委員会へ提出することが決議されました(遭難対策規程の改訂)。

すなわち、それぞれの支部、本部の委員会・同好会においては登山計画書をすべての山行について提出していただき、支部、本部の委員会・同好会においてその登山計画書をチェックしていただく機

関を設定し、必要があれば山行メンバーと相談、アドバイスをするなどして、より適切で安全な登山を行なっていただけよう体制を整えていただくというものです。

これによって受理された登山計画書を遭難対策委員会へ提出していただきます。なお、上記に示しました支部、本部委員会・同好会のいずれにも関係しない個人山行につきましては、直接遭難対策委員会へ提出していただきます。また、もっぱら登山を目的としない本部委員会・同好会につきましては、登山計画書を受理する機関を設けなくても結構です。その場合は、作成した登山計画書を直接遭難対策委員会へ提出してください。

まず、登山計画書を作成することは登山の基本であり、これを習慣化することの重要性を会員全員に改めて認識いただきたいと思います(「遭難対策規程と遭難対策運用要領は当会ホームページからご覧になれます」)。

これを機に、改めて山行前の準備が周到にできているか、これまでの自分(たち)の登り方に無理や危険がなかったか点検してください。そして反省すべき点を見つけて、改善していただく「体質改善」を謙虚に心掛けましょう。

第34回全国支部懇談会 神々の遊ぶ庭(カムイミンタラ)、北海道の 屋根・大雪山へ

主催 公益社団法人・日本山岳会

北海道支部

期日 平成30年7月21日(土)～22日

(日)

宿泊 層雲峡温泉・層雲閣グラン

ドホテル 〒078-17

92 北海道上川郡上川

町層 雲峡温泉 TEL 01

658-53111

参加資格 会員、準会員および関

係者

会費 2万円(1泊2食、山行時の

バス・ロープウェイ・リフ



大雪山・白雲岳から望んだ最高峰の旭岳 市根井孝悦撮影

ト代を含む)

申込期間 3月1日～3月31日

申込み方法 支部単位で一括

日程 1日目 7月21日(土)受付開

始14時 開会式15時～

(ホテルの浴衣はご遠慮く

ださい) 講演会15時30分

～16時30分「母なる大

地・大雪山に魅せられて」

講師Ⅱ大雪山写真ミュー

ジウム館長・市根井孝悦会

員 休憩時間16時45分～

(入浴など) 懇親夕食会

18時～(郷土民俗芸能20

分) 二次会20時～(参加

希望者は費用別途)

2日目 7月22日(日)3コ

ースに分かれて実施

縦走コース(6時ホテル・

バス発)銀泉台登山口―

赤岳―小泉岳―分岐―北

海岳―黒岳石室―黒岳―

リフト・ロープウェイ―15

時ホテル)〈健脚向き、所

要時間10時間、登山時間8

時間)

B

黒岳―黒岳石室コース
(ホテル朝食後、ロープウ

エイ・リフトで7合目から

(歩行1時間20分)―黒岳

(歩行30分)―黒岳石室(

桂月岳往復1時間)。(所要

時間5～6時間程度)

黒岳7合目周辺散策、下山

後の大雪山写真ミュージ

ウム見学(ホテル朝食後ロ

ープウェイ・リフトで7合

目―散策、下山後ロープウ

エイ乗場から300mで

ミュージウム・無料) (所

要時間4時間程度)

*3コースとも下山後の入浴は、

同じホテルで無料です。

申込み・問合せ 日本山岳会・北

海道支部事務局 副支部

長・事務局長 藤木俊三

〒005-0832 札幌

市南区北ノ沢2丁目19-18

TEL・FAX 011-572-6

483

✉49681sakamachi@jcom.

home.ne.jp

*募集要項は別途、北海道支部か
ら案内文と申込書を各支部に
発信します。

つた不動岩とその奥の洞穴を見る
ことができた。台風22号の中、ず
ぶぬれでたどり着いた、天井画で
名高い37番岩本寺のご住職からは、
「様々な方々が、皆様のお遍路を支
えています。お大師様へのお参り
と霊場への参拝、そして、お遍路
を支えて下さる方々への感謝の気
持ちを、ご自身の体とよく相談を
してお遍路を続けてください」と
のお言葉をいただいた。

土佐では、私設の道標が多く目
につく。迷いやすい所で待機して
いて案内している方もいた。工事
現場の事務所では、お手洗いを使

わせていただいた。お店がない長い道のりを歩くとき、民宿で用意いただいたお弁当に心温まった。

大所帯の我々に50個ほどの柿やミカン、バナナのお接待をいただいた。それでも重たいザックがパンパンになり、ありがたいやら重いやらで、休憩ごとに急いで食べた。

予定どおり10月31日に足摺岬に到着し、「修行の道場」を無事終えることができ、本当にありがとございます。来春も、皆様と愛媛県（菩提の道場）を歩けるよう精進したいと思います。
（小山幸勇）

資料映像委員会

第21回全国山岳博物館等連絡会議を開催

2017年11月25日(土)13時から17時まで、日本山岳会集會室にて開催した。

参加館は5館、7名。富山県「立山博物館」(富山)、富山県立山カルデラ砂防博物館(富山)、谷川岳山岳資料館(群馬)、松本市山と自然博物館(長野)、公益財団法人植村記念財団(東京)、本会からは委員・理事8名が参加した。

主な会議の内容を紹介する。

公益財団法人植村記念財団は板橋区にあり、本年が25周年に当たるので、25周年記念講演会を開催した。夢枕獭氏に講演をいただき、好評であった。植村直己の紹介映像を流したが、映像の作成段階で、日本山岳会の協力を得た。当資料委員会自身も、設立初期の段階で、この館に色々お世話になった。

谷川岳山岳資料館は谷川岳ロープウェイの前にある。谷川岳関係者の保有する絵画や写真の展示会、「谷川岳山開き」「山の日」などのイベントを行なった。夏季に天候不順が続いたため苦労した。

富山県立山カルデラ砂防博物館は、来館者が非常に多いこと。多い日には、1日5000名を超える日もあった。台湾をはじめとする外国人も急激に増えている。特に雪の大谷を見に来る客が当館に立ち寄ることも多く、パンフレットや説明員など、外国人対策も進めている。中心となるカルデラ砂防関連の行事は、期間を通じて多数開催しており、小、中、高校の参加も多い。

富山県「立山博物館」は、立山信仰の拠点の一つである立山町芦峯

寺にあり、宗教性の高い博物館として有名である。本年は布橋灌頂会という女性を救う行事が3年に一度行なわれる年に当たり、それにちなんだ企画展を行ない、注目を集めた。また、特別企画展として、「宮様、山へ」を開催した。日本山岳会をはじめとする本会議の関係者の方々に協力いただいたお陰もあり、大変充実した内容とすることができた。

松本市山と自然博物館は、姉妹博物館の松本市立博物館で、特別展「武井真澄展」を行なった。武井真澄は山岳画家のひとりで、日本山岳会の会員章をデザインした方でもある。日本山岳会のロビーに展示してある会員章数点を借りて展示した。

今年は開催日直前で都合がつかなくなった館もあり、参加館が少なかったが、21回目と永い経験に基づき、内容の濃い大変有意義な内容となった。各館で行なわれるイベントも相互に連絡し合い、よりレベルアップが図れてきたように感じる。資料映像委員長が、今年度から新委員長に代わり、一層活性化が期待されている。

(齋藤知茂)



図書紹介

人を襲うクマ

羽根田 治著



2017年10月
山と溪谷社 223頁
四六判 1600円＋税

る奥多摩の山頂付近であったり、時も場所も選ばない遭遇例である。これは近年、山の環境が変化し人と遭遇する山域、山麓などにもクマが食糧を求めざるを得ない背景が影響している。

第2章のインタビュー記事、「地元猟師が語る、秩父のクマの今」はそうした現状を知る上で示唆に富んだ内容。現場を知る猟師の語り口は平易だが、言葉は重い。「これから必要なのは、何年もかけて人間が自然を壊しちゃったんだから、今度は何年もかけて人間がそれを再生すること。そうすればいい水、いい太陽の光が戻ってくるんですよ。山に棲む動物たちがいい環境の中にいられるのが、人間にとっても本当はいいことなんじゃないかな。それが人間の将来につながると思うんだけどね。」

山岳遭難を主に扱う著者は緻密な取材と、あくまでもノンフ

イクシヨンの姿勢で数々の本を送り出しているが、今回の取材事例「畳平駐車場襲撃事故(北ア・乗鞍岳)」でも、当時マスコミ報道された内容の誤謬を訂正している。被害者の男性が騒いだための襲撃ではなく、クマに襲われた女性の救助のために負傷したという。こうした地道な取材によって、公にされなかった被害者男性の名誉も一部回復できたであろう。また第1章では、かつて(1970年)の北海道・日高山脈における福岡大学ワングル部員のヒグマ襲撃事故も、現在の視点を含め改めて検証している。

掲載事例を見ても分かるが、「あとがき」には「クマによる人身事故を防ぐには、クマと遭遇しないようにすることが最良」だと。しかし、山に入る限り遭遇を100%避けることはできない。そしてまた、遭遇したときの対処法にも「たぶん正解はないのだから」と記し、結局は「運を天に任せるしかない」ような気がする」と結論する。冗談半分で「クマに遭ったら……」という期待感を抱くことも少なからず登山者にはあるかと思われるが、人の力ではいかんともし

寄付金及び助成金などの受入報告

(平成29年11月30日まで)

寄付者など	受入金額など (単位千円)	寄付の目的、その他
(公)大分県芸術文化スポーツ振興財団	150	国際交流団体等活動活性化事業補助金
熊本支部会員 ほか45名	514	熊本支部設立60周年記念式典運営費用等の募金
北原秀介 会員	70	群馬支部運営
中谷康司 会員	50	青年部講習会実施費用
小林政志 理事	100	日本山岳会運営
中山茂樹 理事	10	日本山岳会運営
永年会員6名 別紙 氏名	82	有志からのご寄付のお願いに対する永年会員からのご寄付

たい現実を忘れてはいけないう、本書は教えてくれている。

(中村好至恵)

図書受入報告(2017年12月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年	寄贈／購入別
高辻謙輔・遠藤俊一(編)	越後山岳(第13号):越後支部創立70周年記念	372p/21cm	JAC越後支部	2017	発行者寄贈
中林暉幸(編)	熊本支部設立60周年記念誌(熊本支部報 第40特別号)	144p/30cm	JAC熊本支部	2017	発行者寄贈
日本山岳会福島支部(編)	やまなみ : 福島支部創立70周年記念誌	156p/30cm	JAC福島支部	2017	発行者寄贈
国立登山研修所(編)	登山研修所50年の歩み	260p/30cm	国立登山研修所	2017	発行者寄贈
中央大学山岳部(編)	中央大学学友会体育連盟山岳部(年報 No.11)	442p/26cm	中央大学山岳部	2017	発行者寄贈
同志社大学極西ネパール登山隊(編)	同志社大学山岳部極西ネパール登山紀行	14p/30cm	同志社大学山岳部	2017	発行者寄贈
薬師義美	ヒマラヤは黒部から : わが山旅の記	478p/20cm	茗溪堂	2017	著者寄贈
上田茂春	山書 - 蒐書日録 (第1巻)	290p/27cm	鳥山房	2018	著者寄贈
上田茂春	山書 - 蒐書日録 (第2巻)	357p/27cm	鳥山房	2018	著者寄贈
樋口一郎	鎌倉&三浦半島 山から海へ30コース	160p/21cm	東京新聞	2017	出版社寄贈
藤原直美・照井克行	岩手県の山 (分県登山ガイド No.02)	152p/21cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
加田勝利	静岡県の山 (分県登山ガイド No.21)	128p/21cm	山と溪谷社	2017	出版社寄贈
Tom Hoyle (ed.)	New Zealand Alpine Journal 2017	152p/25cm	New Zealand Alpine Club	2017	発行者寄贈



平成29年度第8回(12月度)

理事会議事録

日時 平成29年12月13日(水)19時00分～20時45分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・谷内各常務理事、安井理事、平井・石川各監事

【欠席者】古川常務理事、大久保、清登、齋藤、星、近藤、波多野各理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・広島支部「幌尻岳事故」について

「幌尻岳事故」を受け広島支部への対応、今後の遭難対策委員会への対応方法、関係官庁への報告について審議した。(賛成8名、反対なしで承認)

2・遭難対策規程改正について

報告

遭難対策規程について全会員を対象に登山計画書の提出を義務付けることを軸に改正することとした。(賛成8名、反対なしで承認)

3・上高地山岳研究所の外壁および屋根の塗装工事について

経年劣化による上高地山岳研究所の外壁および屋根の塗装工事の予算化について審議した。(賛成8名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・登山計画書の提出システムの構築について(中山)

遭難対策規程の改正と連携した登山計画書の提出システムの構築について協議した。

【報告事項】

1・11月9日～12月12日受付分の入会希望者13名(うち復活会員1名)、准会員入会希望者9名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

あった。(小林)

2・熊本支部、永年会員からの寄付金を含む計6件の寄付金の受入について報告があった。(谷内)

3・熊本支部創立60周年、国立登山研修所創立50周年各記念式典への出席について報告があった。(重廣)

4・第1回記念事業委員会の開催状況について報告があった。(重廣)

5・遭難対策運用要領改正について報告があった。(中山)

6・「JAC学生部ザンスカール遠征2017」、早稲田大学「ラジヨダダ遠征」2隊の遠征報告があった。(中山)

7・年次晩餐会の開催状況について報告があった。(永田)

8・NPO法人静岡山の文化交流センターからの後援名義使用申請について許可を行なったとの報告があった。(永田)

9・「山」12月号の発行について報告があった。(神長・節田)

【連絡事項】

1・日本山岳・スポーツクライミング協会「平成30年新春懇談会」1月13日(土) 13時から15時(受付

12時30分より) アルカディア市ヶ谷「富士の間」

2・東京都山岳連盟「2018年都岳連新春の集い」1月20日(土) 15時開宴(受付14時30分より) ホテルJALシティ田町 東京

【今後の予定】

1・事業計画・予算等

・平成30年1月15日 平成30年度支部・委員会 事業予算(提出期限)

・平成30年1月31日 平成30年度支部・委員会 事業計画(提出期限)

・平成30年1月下旬 平成29年度支部・委員会 事業報告・会計報告(提出依頼)

・平成30年2月下旬 平成29年度支部・委員会 事業報告(提出期限)

・平成30年3月下旬 平成29年度支部・委員会 会計報告(提出期限)

ルーム日誌 12月

1日 総務委員会 マウンテンカ
ルチャークラブ

4日 総務委員会 学生部

常務理事会

5日 図書委員会 山行委員会

6日 「山の日」事業委員会 Y O

7日 U T H C L U B

8日 Y O U T H C L U B

11日 自然保護委員会 スキーク

12日 ラブ スケッチクラブ

山岳研究所運営委員会 S

U N 燦会 平日クラブ

J A C グローバルクラブ

13日 理事会 休山会

14日 支部事業委員会 山岳地理

クラブ 九五会

15日 Y O U T H C L U B

16日 緑爽会 山の自然学研究会

18日 総務委員会 資料映像委員

会

19日 フォトクラブ スキークラ

ブ 里山歴史研究会

20日 デジタルメディア委員会

三水会 二火会 つくも

会

21日 科学委員会 青年部 01会

22日 緑爽会 山遊会

25日 Y O U T H C L U B

26日 遭難対策委員会 家族登山

普及委員会

27日 麗山会 フォトクラブ

12月来室者 450名

会員異動

物故

藤村隆輔(2068) 17・5

名和 顕(7710) 17・11・27

二村秀広(9264) 17・12・15

小川子野(11758) 17・12・22

高石道明(13863) 17・10・21

退会

布目治二(8875) 東海

斎藤恵子(11452) 秋田

内藤芳夫(12423) 東海

尾道憲二(13094) 広島

小林重一(13506) 越後

小畑廣久(13606) 無所属

両条輝正(13685) 広島

田矢八束(14071) 首都圏

伊藤康信(15195) 東海

永年会員からのご寄付の報告

平成29年10月から11月までの間に、6名の永年会員の皆様から合計8万2000円のご寄付をいただきました。ここに謹んで御礼申し上げます。

(順不同、敬称略)

2万円 野村孝義、遠藤京子

1万5000円 小貫伸一

1万円 鈴木恭一郎、鈴木宏

(1万円未満1名の氏名省略)

I N F O R M

インフォメーション

A T I N

◆医療委員会主催講習会「雪山の医療」のご案内

雪山には夏山とは異なる様々な危険があります。今回、雪山で遭遇する危険のある低体温症、凍傷、雪崩遭難などについて、一般の方にも分かりやすく、症状、予防、対処などの医療的対応についてお話します。

日時 2月26日(月)19時～20時45分
講師 野口いづみ(JAC医療委員会委員長)

場所 日本山岳会104号室

会費 資料代500円

定員 30名

申込み/問合せ ☒ yamainyou@yahoo.co.jp

氏名、連絡先(住所・電話番号)、会員番号を記してお申込みください。会員以外の方もお申込みできますので、お誘いください。

締切り 2月20日

詳細は日本山岳会医療委員会H

Pをご覧ください。(http://www.jac.or.jp/info/iinkai/iryu/list.html)

◆医療委員会主催「第2弾・登山のためのストレッチ教室」のご案内

10月に膝痛と腰痛のある登山者にフォーカスしたコンディショニング・ストレッチ教室を開催しました。今回はその第2弾として、前回の復習に加えて、登山前の動的ストレッチと登山後の静的ストレッチにフォーカスした教室を開催します。講師は前回と同様に西方由美子先生(運動療法士)です。

復習をされたい方、都合によって参加できなかった方、登山前後のストレッチをしつかり学びたい方、分かりやすく、楽しい実技教室に参加しましょう。

日時 3月9日(金) 18時50分～20時50分

場所 東京体育館第1会議室(J

『山岳』第113年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十三年(2018年)の発刊は、本年6月下旬を予定しております。原稿の締め切りは3月末となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

【送り先】〒274-0073 船橋市田喜野井 2-1-4
節田重節

TEL 047-476-1237 E-mail j-setsuda@ray.ocn.ne.jp
(『山岳』編集委員会)

R千駄ヶ谷駅前(徒歩2分)
会費 資料代500円
定員 35名
申込み/問合せ ☒ yamairyou@yahoo.co.jp
氏名、連絡先(住所・電話番号)、会員番号を記してお申し込みください。会員以外の方もお申込できますので、お誘いください。
締切り 2月28日
詳細は日本山岳会医療委員会HPをご覧ください。
(http://www.jac.or.jp/info/inkai/iryou/list.html)

◆フォーラム——登山を楽しくする科学(X) 科学委員会

日時 3月10日(土)13時~17時(受付12時30分~)

場所 立正大学品川キャンパス11号館1151教室

演題 ①「山の写真を楽しむ——初級者から脱皮するために——」日本山岳写真協会員・大村肅氏

②「山での虫刺されと対策——ハチ、マダニなど——」日本山岳会医療委員会委員長・野口いづみ氏

③「ライチョウを守り育てよう」環境省長野自然環境事務所自然保護官・福田真氏

定員 先着300名(受講票は送付しません。定員オーバーの場合のみ連絡します。)

費用 500円(資料代)

申込み 米倉久邦まで。☒ kagaku@jac.or.jp または、ハガキ(〒102-0075 東京都千代田区三番町7-6-303 米倉久邦)で

*立正大学品川キャンパスへのアクセスは(http://www.ris.ac.jp/access/shinagawa/index.html)を参照。「山手通り口」をご利用

ください。

◆四国八十八ヶ所歩き遍路③

順打ち1国愛媛参り

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ち(2年間)の3回目。愛媛県(菩提の道場)の39番延光寺から64番前神寺まで順打ちします。歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所遍路大使が遍路・巡拝・服装等の作法はお教えします。今回からの参加、大歓迎。短期間体験してみたい方、ご相談ください(3月31日~4月2日)。遍路用品は途中購入もできます。

日程 3月21日(水)~4月2日(月)12泊13日

集合 21日(水)高知県土佐清水市高知西南交通バス 市野瀬バス停10時40分。20日(火)東京発の夜行高速バスで高知着

または20日前泊、JR高知8時20分発(しまんと1号)中村駅着10時4分。高知西南交通バス 中村駅10時14分発 足摺岬行きで、市野瀬バス停10時36分着

行程 21日宿毛市(泊) 22日39番延光寺——40番観自在寺 愛南町(泊) 23日津島町(泊) 24日41番龍光寺 宇和島市(泊) 25日42番仏木寺——43番明石寺 大洲市(泊) 26日内子町(泊) 27日44番大寶寺——45番岩屋寺久万高原町(泊) 28日46番浄瑠璃寺 松山市(泊) 29日47番八坂寺——53番円明寺 松山市(泊) 30日大西町(泊) 31日54番延命寺——58番仙遊寺(泊) 4月1日59番国分寺——61番香園寺——62番宝寿寺 小松町(泊) 2日60番横峰寺——63番吉祥寺——64番前神寺——JR伊予西条(解散)

歩程 1日20~30km(健脚向き)

費用 参加費1万円(通信費、写真代など)、一日1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 10名(先着順)

申込み 3月9日(金)まで 数見直

TEL 090-720-4668 ☒ sanko@jac.or.jp

◆八ヶ岳・峰ノ松目と硫黄岳

積雪期も多くの登山者が訪れる 山行委員会

八ヶ岳にあつて、訪れる人も少なく、深雪のラッセルが楽しめる峰ノ松目に登り、さらに赤岩ノ頭を経て硫黄岳を目指します。

日程 3月4日(日)〜6日(火)

集合 4日9時10分 JR茅野駅

東口

行程 4日〓桜平―夏沢鉱泉―15

時までラッセル―夏沢鉱泉

(泊) 5日〓夏沢鉱泉―オー

レン小屋―峰ノ松目―硫黄岳

―夏沢峠―夏沢鉱泉(泊)〔歩

程10時間〕 6日〓夏沢鉱泉

―桜平

解散 6日9時ごろJR茅野駅

参加費 2万9000円(2泊分)

募集人数 10名

申込み 2月10日までに 菊池武

昭宛 ☒sanko@jac.or.jp

FAX/TEL 03-33991-3611

*参加者には詳細案内いたします。

◆第27回「山好きの山の絵展」開催

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催しており、今年は27回目を迎える。60人の会員が実際に登り、見た山々を描いた作品で、水彩画、油彩画、版画など約70点とスケッチブックを展示。

会期 2月18日(日)〜2月24日(土) 時〓18時(初日は12時45分から/最終日は17時まで)

会場 JR有楽町駅前 東京交通

会館2Fギャラリー 千代

田区有楽町2-10-1

TEL 03-3215-7962 入

場無料

*富樫信樹・すがぬまみつこ二

人展を同会館B1F エメラル

ドルームにて同時開催

◆「南アルプス学概論」講座

「南アルプス自然の魅力」講演会

を行ないます。

日時 3月17日(土)13時30分〜18時

場所 明治大学リバティータワー

1012教室(266名収

容)千代田区駿河台

座長 小嶋尚(明治大学名誉教授)

演題1 特徴的な生物多様性の世

界(14時〜15時30分) 講師〓

増澤武弘(静岡大学客員教授)

演題2 独特の地理的概要(16時

〜17時30分) 講師〓長谷川

裕彦(明星大学准教授)

賛助金 1000円、学生500円

主催 NPO法人静岡山の文化交

流センター

後援 静岡県、公益社団法人日本

山岳会、公益社団法人東京都山岳連盟、日本山岳文化学会協賛 中外製薬、日星電気、寸又

峡温泉翠紅苑

受講へのお誘い

①山の自然をあらゆる角度から知

ることが、山登りをより有意義な

ものにしてくれます。

②南アルプスの自然の特徴とその

魅力はあまり知られていません。

③リニア新幹線工事が、南アルプ

スの心臓部の地下で始まっています。

南アルプスは今、変革のときを

迎えています。

訂正

●会報12月号(871号)13ページ

「支部だより(宮崎支部)」本文中、

引用文の「〓在留同国人ウエスト

ン氏同道にて〓」は「〓在留同国人

エストン氏同道にて〓」の誤り、ま

た14ページ同稿末尾の筆者名は

「荒武八起」の誤りでした。筆者・

荒武さんをはじめ皆様には、大変

ご迷惑をお掛けいたしました。お

詫びして訂正いたします。

(編集部)

◆編集後記◆

●2009年7月に起きたトムラウシ山遭難事故で、北海道警は昨年、ツアー会社の当時の社長と3人のガイドを業務上過失致死傷の疑いで書類送検しました。今後、どのような展開になるか分かりませんが、当時、遭難事故調査特別委員会の座長を務めた身としては、改めて最終報告書を読み返しているところです。

●ツアー登山の脆弱さは、集団登山やグループ登山にも言えることです。パーティーで登っているとはいえ、基本的には「自分の身は自分で守る」という心構えが必要です。そのため、迂遠な道ながら一つ一つの山行を重ねていくことによって何を学び、経験し、蓄積していくのが、自立した登山者という「頂上」への道程ではないでしょうか。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 872号

2018年(平成30年)1月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重彰
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社